

特集「太陽系天体の種別とその概念整理」 「惑星の定義はどのように報道されたか」

渡部 潤一¹

(要旨) 2006年夏の国際天文学連合における惑星の定義については、社会的な関心が高く、多くのメディアで一斉に報道された。報道内容を見ると、取材不足に基づく誤解が目につくなど、その質に疑問を持たざるを得ないケースも見られた。そこで、このテーマについて情報提供側である研究者の立場から、報道内容が正しいかどうかについて評価してみた。新聞はそれほど差がつかなかったが、テレビ報道については、NHKが圧倒的に高い評価を得ており、一部の民放との間に大きな差があることが明らかになった。

1. はじめに

惑星の定義の採択は、われわれの学会員だけでなく、多くの一般の人の注目を集めることになった。これまで長い間、常識とされてきた知識、特に「水金地火木土天海冥」と覚えてきた惑星のリストが変更されることに、とまどいを覚えた人も多いからだろう。国立天文台の質問電話窓口は、こういった決定に納得できない人から電話が多数かかってきたが、その大部分は正確な知識や経緯についての理解が足りなかったための誤解に基づくものであった。もちろん、一般の方に学会員レベルの理解を求めるのはなかなか困難な話ではあるが、誤解を生み出した原因の一つは報道にあったことは確かである。

報道によって、多くの一般の人が、最新の天文学・惑星科学の成果を知ってもらいたいへんありがたい。しかし、その一方で、情報を流していく立場(国立天文台広報室長)としては、かねてから報道側にも質を改善して欲しいと思うことがままあった。その意味で、かねてからマスメディアと研究者コミュニティのあり方を考え、シンポジウムなどを通じて、その両者の相互理解を図る試みなども行ってきた。その視点からみると、今回の惑星定義に関する報道は、ひとつの試金石になりうると考えている。というのも、多くのメディアが取り上げるほどニュース・バリューが大きくなったために、同じテーマについて、各メディア

で一斉に報道がなされたからである。いってみれば、マスメディアのクオリティ・チェックに用いることができる。本稿は、この視点で、この問題について日本のメディアの誤解と問題点、報道の質について研究者側から論じたものである。

2. 惑星の定義について

筆者は国際天文学連合の惑星定義委員会の委員として、2006年当初から夏のプラハの総会まで、一連の定義決定のプロセスを見てきた。最終的に、定義については落ち着くところに落ち着いたという感がある。この間の経緯については、すでに紹介してきたし[1]、また、この決定を受けての国内での動きについては、本特集の海部宣男氏の稿に詳しく紹介されているはずなので、ここでは触れない。

強調しておきたい点は、人の用いる言語や言葉の意味が時代と主に変遷するように、「惑星」そのものの意味も変遷し、多様な太陽系の天体が見えてきた現時点で、なんらかの共通項をとりだして定義しておかないと社会的に混乱を引き起こす、ということである。同じような例は星座の歴史に見られる。かつて、ヨーロッパ各国は、大航海時代以後、南天にみえてきた新しい空に競うように新しい星座をつくっていった。境界線が曖昧なことを逆手にとって、パトロン(国王)の名前を星座にしようとした例も現れてきた。各国で異なる星座を用いていることが、社会的にも学問的にも

1. 自然科学研究機構 国立天文台 天文情報センター

混乱を招きはじめてため、国際天文学連合は1928年に、現在の88星座を境界線を含めて決定したのである。冥王星よりもサイズが大きな天体を、第十惑星にすべきだと主張する発見者グループの主張がメディアで取り上げられ、そうすべきではないという天文学者のコメントと共にメディアを賑わした状況は、まさに混乱の手前であり、今回の総会で、(もちろん多様な意見があり、幾多の欠点もあるものの)まがりなりにも定義を明確にしたことは、天文学・惑星科学のコミュニティが国際的な責任を果たした、と言う意味では大きな成果であったと言えるだろう。

この定義の採択により、歴史上はじめて共通の理解としての「惑星」が定められた。そして、冥王星は惑星ではなく、今回新たに作られた分類：惑星に準じる天体としての「準惑星」へ配置換えとなった。これまでの太陽系の天体の粗分類は、惑星か、そうでない小天体かという二分類であったが、新しい定義では、これを惑星、準惑星、小天体という三分類としたわけである。また、冥王星を代表とする、太陽系外縁天体&準惑星というものを冥王星型天体と呼ぶことになった(注1)。

3. メディアはどう報道したか？

専門家であればしばしば、当該の専門に関する一般向けのメディア報道に触れた時に、なるほどと感心する人はまずいない。その不正確さ、あるいは恣意的に取捨選択された内容などに憤りを持つような経験の方が多いようである。それは専門家ゆえの知識・理解の深さに比して、最終的な報道では、あまりにも情報が取捨選択されて、不正確さを感じることによるものである(このあたりの分析については、「基礎科学の広報と報道に関するシンポジウム集録」, 2002, あるいは「学術成果の広報と報道に関するシンポジウム集録」, 2004などを参照のこと。)

惑星の定義に関する報道も同様である。学問が進んで、多様な太陽系の天体の姿が見えてきたために策定された定義という背景は、一部の良質な報道を除けば、なかなか表にでることがなく、「冥王星が惑星から降

格された」、という具合に集約されてしまった。さらに過熱気味の報道の中には、取材不足に基づく誤った内容、とりわけ今回の冥王星問題が欧米の対立であるかのように、すり替えられるような報道も散見され、結果として広く豊かになった太陽系の描像は正しく伝わらなかったと感じている。

これらの報道でみられた問題点をいくつかあげておきたい。まずは、冥王星の位置づけを巡る議論である。冥王星はアメリカ人が発見した唯一の惑星であることから、アメリカが国を挙げて惑星として存続すべく運動したという具合に、まことに単純に欧米対立という視点でステレオタイプ化した報道があったのは確かである。影響力の大きなニュース番組が多かったため、一般の方々の中には、いまだにそう思っている方もいる。この種の報道の多くは取材不足と同時に、情報の恣意的な取捨選択による物語化・単純化で、行き過ぎたストーリー化が原因である。実際にはアメリカ人でも準惑星など作らずに冥王星を小天体へ位置づけた方がよいと考える学者も多いし、ヨーロッパ人の中にも、冥王星を惑星として残すべきと強い意見を持っている人もいた。惑星科学・天文学に国境はないので、それぞれの国ごとに意見がまとまるようなことは通常は、ありえない。

二つ目の問題は、惑星の観点から「降格」された冥王星が強調されてしまったことである。広がり、豊かになりつつある太陽系の新しい描像や背景が、もののみごとにカットされてしまっている。この問題を日本記者クラブの会合で講演したときに、「人目を引くキャッチコピーとして代わりの文言が考えられるのか。われわれは、まず記事を読んでもらわないと始まらない。多少過激でも中身を読んでもらうためには仕方ないのではないか？」と反論された。もちろん、これはわれわれ学者コミュニティとして要求が過度なかもしれない。しかし、学者はマスコミに迎合し、その程度の報道でよい、と妥協してはいけないのである。意義付けや正しい理解を報道すべきと堂々と言っていく態度を持たないと、良好な関係にならないと考えている[2]。こういったいい意味でのマスメディアと学者コミュニティの緊張関係があれば、「あるある大辞典II」のようなねつ造を防ぐことにつながるはずである。

三つ目の事実誤認は、多数決による決議が「圧倒的多数」と報道していた点である。惑星の定義案は、本

1. 英語名は未定ながら、日本は先行して、日本学術会議のもとで開催された「太陽系天体の名称等に関する小委員会」において、この呼称を推奨することに決定した。

表1：国立天文台広報室による惑星の定義報道の評価（TVニュース番組と報道番組について）

テレビ局	番組名	月日	評価
NHK	クローズアップ現代	8月31日	8.0
NHK	週間こどもニュース	8月26日	6.9
NHK	おはよう日本	8月25日	6.9
NHK	ニュース7	8月24日	6.8
NHK	ニュースウォッチ9	8月25日	5.9
NHK	ニュースウォッチ9	8月24日	5.8
4ch	きょうの出来事	8月24日	5.7
NHK	ニュースウォッチ9	8月16日	5.7
NHK	ニュース7	8月25日	5.5
フジ	スーパーニュース	8月24日	4.1
フジ	とくダネ!	8月21日	4.1
フジ	とくダネ!	8月21日	4.0
テレビ朝日	報道ステーション	8月24日	1.0
		平均	5.4

表2：国立天文台職員ボランティアによる惑星の定義報道の評価（TVニュース番組のみについて）

順位	テレビ局	番組名	月日	評価	標準偏差
1	NHK	おはよう日本(約9分)	8月25日	8.68	1.51
2	NHK	ニュース7(約6分)	8月24日	7.79	1.72
3	NHK	ニュース7(約4分)	8月25日	6.81	1.72
4	NHK	ニュースウォッチ9(約6分)	8月25日	6.44	7.73
5	TBS	筑紫哲也NEWS23(約3分)	8月24日	6.25	1.74
6	日本テレビ	きょうの出来事(約5分)	8月24日	6.07	1.85
7	フジテレビ	スーパーニュース(約9分)	8月24日	5.04	2.10
8	テレビ朝日	報道ステーション(約16分)	8月24日	4.32	2.67

案と修正案とが総会にかけられた。まず本案が可決され、その後、修正案が否決されたのだが、この順序は日本とは異なる。日本の場合は修正案審議が先になるからである。今回の場合、修正案に賛成する人も本案に賛成せざるを得ない順序である。したがって、本案に賛成した人はほぼ100%であったが、その中で修正案に反対の人は75%にすぎず、残りの25%の人は修正案(準惑星を広い意味での惑星の範疇に含める案)の方に賛成だったのである。この点については、ほとんどのメディアが理解していなかった。

4. 報道の評価の試み

そこで、われわれは各メディアがどの程度の正確さをもって報道していたかを検証することにした。初期の段階で集まったテレビ報道について、まずは入手可能なものを広報室内で、“正しく、かつ誤解なく報道しているか”の基準で、10点満点で評価をしてみた結果が表1である。まず二つの特徴がわかる。ひとつはNHKの圧倒的な強さである。これは筆者がプラハ

の現場にいても、同じように感じたことだが、一般に取材日数などが多ければ多いほど報道の正確さは増していくようである。NHKや民報でも日本テレビ系列は、総会開始すぐに人を送り込んできていた。逆にもっとも点数が悪いのはテレビ朝日であるが、ここは取材が総会当日だけだった上、例の欧米対立図式を前面に出した報道をしてしまったのである。実際、ここの取材は浅かった。現地で採決風景の生中継をしており、その声で議論が聞こえなくなるほどで、まわりの天文学者の聳動を買っていた。

ところで、圧倒的な高得点を得ているNHKのいくつかの番組は、筆者や国立天文台関係者がスタジオなどに出向いて解説している。これを数十分もない枠の中で報道する他のニュース報道番組と一緒にするのは、どう考えてもフェアではない。それに、国立天文台の広報室の職員は、それだけで惑星定義については圧倒的な理解と知識を持っているので、審査側を広げてみる必要もあるかもしれない。ということで、国立天文台全員に呼びかけ、審査ボランティアを募った。手を挙げてくれた合計29人の職員に、8月25日の朝刊夕刊

24本の新聞記事および、8月25日前後のテレビの報道系番組内での報道8本のコピーを渡して、おなじく10点評価を試みた。

新聞の評価結果は、テレビほどは差がつかなかった。点数は7.55から5.61までの2点差以内に収まっており、ばらつきは少ない。新聞評価の結果については別のところでも紹介しているので割愛する[3]。テレビの結果を表2に示す。大きな傾向は、表1とそれほど変わらなかった。新聞は文字メディアという記録に残る性質からか、テレビに比べれば、みな気をつけて取材も報道もしている、ということになるのかもしれないが、それはそれで問題である。最低点の報道ステーションは少なくとも人気番組であり、新聞よりも影響は大きい可能性がある。人気番組における科学報道が、このレベルの取材で誤解に基づく報道をしているとすれば、社会生活に密接に関わる他の生命倫理や公害なども、この程度である可能性が高い。もし、他の分野の報道でも同じレベルなのだとすれば、空恐ろしい話である。たしかにダイオキシン問題の発端は、この番組(の前身)だったはずである。影響力の大きな番組だからこそ、内容の質を保つべきである。世論を決めてしまうような人気番組であればこそ、文字メディアを越えるような正確さを求めたい。

蛇足になるが、せっかく評価した結果は、様々なところで公表していきたい、ということで春の連合大会での発表、それに国立天文台で毎年開催している「科学記者のための天文学最新線レクチャー」でも、発表させて頂いた。その際に、最高点をとったTV部門のNHKと、新聞部門の産経新聞には、それぞれに最優秀報道賞の賞状を授与した。このように悪いところは批判し、良いところはちゃんと良い評価をしていく姿勢を、今後は研究者コミュニティとしても気をつけるべきであろう。

5. われわれがやるべきこと

メディアを批判するのは簡単である。だが、その批判は倍になって研究者コミュニティや研究機関、そして研究者一人一人に跳ね返ってくることは覚悟しておかねばなるまい。太陽系の多様さを伝え、エキサイティングな学問の進歩を伝えようとする努力を、コミュニティとしているのか、と厳しく問われることになる。

ただ、少なくとも天文学・惑星科学に関しては、しっかりと努力をしていると堂々と言えると筆者は考える。直後の惑星科学会の動きも素早く、学会の知名度を上げる上で大きな効果を上げたと考えている[4]。また学術会議を中心とした一連の動きも、他の国には見られない活動であった。

個々人の研究者の努力も見逃せない。本特集のような企画もそうだが、関連研究者はあちこちで講演や執筆を通じて、一般社会への普及に努めている(例えば、[5]、[6])。ちなみに筆者の、この惑星定義に関する一般向け講演回数は実に50回に達している。今後は「かぐや」や、それに続く惑星探査ミッションを中心に、惑星科学分野に対するメディアの注目度も上がってくるだろう。こういった風潮を、うまく活用して、いろいろなレベルで、この分野の面白さをアピールすべきであろう。

最後に、この一連の騒動で取材攻勢にあいながら、予備知識のない記者に対して、(もう少し、勉強して来いよ、と言いたい気持ちを抑えながら)奮闘した(私自身を含めた)各研究者諸氏へのエールとも思える、ある新聞記者からのメッセージを、ぜひ紹介しておきたい。

「約20年間の記者生活の中で、こんなに広報体制が充実していた取材は初めてです。天文学への理解を深めて欲しい。天文学の魅力を一人でも多くの人を感じるようになって欲しい。天文学の奥深さを、多くの人々、特に子供たちに伝えて欲しいという熱意がひしひしと伝わり、とても気持ちのいい取材ができました。」

参考文献

- [1] 渡部潤一, 2006, 遊星人(日本惑星科学会誌)15, 142.
- [2] 渡部潤一, 2004, 科学ジャーナリズムの世界, 日本科学ジャーナリスト会議編(化学同人), 24.
- [3] 渡部潤一, 2007, パリティ 22, 59.
- [4] 渡部潤一, 2006, Japan Geoscience Letters(日本地球惑星科学連合ニュースレター) 2, 8.
- [5] 布施哲治, 2007, 「なぜ、めい王星は惑星じゃないの?」(くもん出版)
- [6] 渡部潤一, 2007, 「新しい太陽系」(新潮新書)